

## バルシュチェフスキ『ベラルーシ幻想譚』より

越野 剛

リトアニア、ベラルーシ、ウクライナはかつてポーランド文化の強い影響下にありました。これらの国々にはポーランド語で書かれた多くの文学作品が残されています。ベラルーシ出身のヤン・バルシュチェフスキ Jan Barszczewski (1790/94-1851) もその一人で、ベラルーシの伝説やフォークロアをもとにした作品をポーランド語で書きました。ポーランド本国では忘れられた作家ですが、ベラルーシでは今日でもよく知られています。代表作の『土族ザヴァルニャ、あるいはベラルーシ幻想譚』(1844-46) は表題に「ベラルーシ」が入った最初の文学作品とも言われます。土族ザヴァルニャの屋敷に泊まる旅人たちが宿賃がわりに語る不思議な物語を集めた、いわばベラルーシ版の「千一夜物語」です。

### 狼に変身した男マルカの物語

そのうちの一話、狼に変身した男の物語を紹介します。マルカというベラルーシ人の農民はアリョーナという美しい娘に惚れこんでいるが、彼女は領主のお気に入りのお婿と望まぬ結婚をさせられます。結婚式の祝いの席でマルカは魔法のかかったウォッカを飲まされて、そのせいで狼に変身してしまいました。マルカはその後何年ものあいだ森の中で暮らすこととなります。腹いせのため自分に魔法をかけた男の娘をさらうという罪を犯しますが、カトリックのお坊さんの説教を聞いて悔い改め、狼の姿のまま人間のために善い行いをしようと決心します。やがて不思議な夢の中で墓場から自分の死体を掘り起こすように命じられ、目が覚めると人間の姿に戻ることができました。ここでは、動物に変えられた人間を元に戻す力を持つという魔女のアクシーニャの屋敷を、オオカミになったマルカが探す場面を翻訳しました。(こしの・ごう)

《森の中から谷間へと駆け下りてみた。天気の良い静かな朝だ。ふと見ると、手足と首がまっ白な猫が草むらに座っている。背中中は白と黒のしまもよう。眼をきょろきょろさせている。ぴょんと跳びはねると花の上の蝶々を捕まえた。猫が楽しそうに跳びはねて遊んでいるのを木陰からずっと見ているうちに、その猫を捕まえたくてたまらなくなり、とびかかった。けれど猫は風のように身軽に草むらから飛び出してしまふ。猫が丘をのぼって走れば、私はその後を追いかける。もうすこしで手がとどくというところで、

なんと猫はカササギに姿を変えて、空に舞い上がってしまう。その先をなおも追いかけていくと、一軒家がぼつんとあるのを見つけた。カササギは屋根の上にとまると再び猫の姿に変わった。よく見ると、そこいらじゅうにいろんな毛色の猫がいる。屋根の上にも、窓べにも、中庭にも、どこもかしこも猫、猫、猫ばかり。

どうやらここが魔女のアクシーニャの住処だろうと察しがついたので、家に入ったものかどうかとその場で考え込んだ。狼の姿をした私は歓迎されないだろうから、どこかで魔女が散歩しているところに顔を出すのがよいだろう。おとなしく足元にはいつくばって私の身の上をあわれんでもらおう。茂みの中に隠れて、よいきっかけを待つことにした。

太陽が森と山の向うに隠れた。うっそうとした森のきわを夕闇が包みこむ。近くの湖は柳にふちどられた水面をまだ光らせていた。すると、猫という猫が、家の中から、屋根の上から、中庭から群れをなして野原のほうに走り出す。そして何かの葉っぱを食いちぎると、その場で若い娘の姿に変身するではないか。娘たちは茂みの間に散らばって、歌を歌ったり、踊りを踊ったり、花を摘んで花輪を編んだりしている。私もその野原に走った。青い小さな花のある葉っぱを見つけて、ちぎって飲み込んだ。するとまたたく間に私は人間の姿になった。えもいわれぬ喜びにかられて、私は蓮っ葉な妖精ルサルカたちの群れに加わった。一緒になって走り、踊って、楽しんだので、自分のみじめな境遇をすっかり忘れてしまうほどだった。

遊び楽しむうちに夜も更けてきた。森には鳥のさえずりも止み、フクロウの鳴く声だけが聞こえる。一羽のフクロウが飛んできて、魔女の家の屋根にとまり、眼をぎらぎらさせながら、赤ん坊のような声で泣いたり笑ったりした。すると不意に森がざわめき、湖で波が岸边に打ち寄せた。ルサルカたちは「真夜中だわ、真夜中だわ」と口々に叫んで、いっせいに猫の姿に変わり、アクシーニャの屋敷の中庭に駆け込んだり、屋根の上に這い上がったたり、窓から家に身を隠すのもいた。私はふたたび狼の姿にもどって森の中に走り、緑の濃いもみの木の下に横たわって、一夜の出来事に思いをはせた。人間の姿に変わるのが長くは続かなかったのは残念だった。ここに残って、ほんのひとときでも自分の不幸せを忘れたいと心に決めた。》